

書字指導におけるよくある質問 Q & A

相談 1：筆圧が強すぎる・弱すぎる

[指導例]

濃い、薄いの原因の一つは、姿勢の問題が考えられます。指先を見る前に、全身の座位姿勢を見ましょう。次に持ち方の問題があります。「親指でっばり持ち」や「先端持ち」は濃くなります。これに対して「垂直持ち」は薄くなります。運筆での指導方法の例としては、濃さが異なる線の見本を見ながら、隣に書く練習もよいです。慣れてきたら、実際に文字を書きながら確認するとよいでしょう。



図1 見本の濃さで書く。

相談 2：板書を写すのが遅い

[指導例]

目の問題が考えられます。一つは視力の問題（近視、乱視など）です。もう一つは、眼球運動の問題です。眼球運動とは、机上の教科書、ノートを見る、黒板を見るなど、距離を測って目を上下左右に動かす力です。この力が弱いと、書きたいという意欲の問題とは別に、板書の遅れにつながります。文字学習だけでは効果は得られにくいです。よって追視（動くものを追う眼球の動き）や距離感を測る眼球運動トレーニングと並行しての指導が必要になります。



図2 数字を追い、線で結ぶ。

相談 3：文字がます目からはみ出してしまう

[指導例]

ます目は正方形です。子どもが「正方形」の図形認知ができていないか、きちんと書けるか確認しましょう。はみ出さないように書くとは、正方形の枠の中に、文字をはめるということになります。正方形を意識しながら、書く能力が求められます。指導のステップとして、文字の始点を正方形のどこの位置に書いたらよいか練習してみましょう。漢字よりも平仮名、片仮名の方が難しいケースがありますので、子どもの苦手な文字に合わせて指導するとよいです。

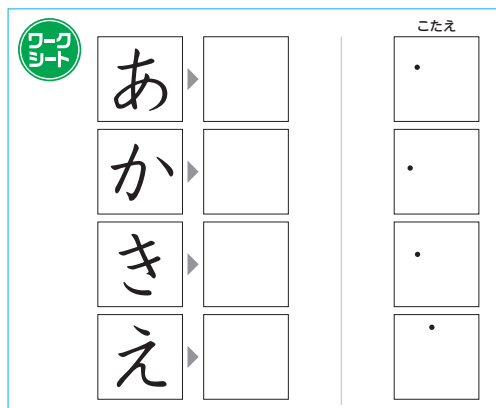


図3 はみ出しやすい文字の例
書き始めの位置に点「・」を書くことで、正方形のます目と、書き始めの位置を確認する。

相談 4：くせ字がなおらない

[指導例]

読めない文字ではないが、見本の文字と比べると、歪んでいるといった相談が多くあります。共通する課題として、字形の斜線が上手に書けないことがあげられます。これには、図形認知の未熟さと鉛筆の持ち方が原因となっていることがあります。鉛筆の持ち方については、前回解説した内容を参考に指導にあたられると、字形がよくなってきます。斜めという空間認知の未熟さがある子どもには、斜線を引いたます目（斜めます）を活用し、字形の運筆の練習をすると効果的です。慣れてきたら、十字リードます、無地で練習をしましょう。

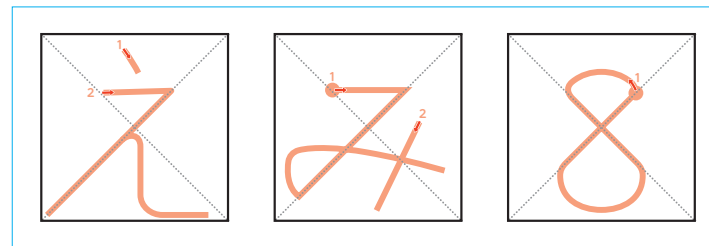


図4 斜めます

「え」斜めますの斜線を手がかりに、二画めの斜線の運筆を学ぶ。
「み」斜めますの斜線を手がかりに、一画めの斜線の運筆を学ぶ。
「8」斜めますの斜線を手がかりに、右斜め、左斜めの位置関係を学ぶ。



ワークシートのPDFファイルをダウンロードできます。

*ワークシートの文字は標準の書体にはとらわれず、苦手な子どもでも書きやすい形で作成してあります。
*段階が進むにつれて、一部の線や始点だけが示されるようになっていきます。

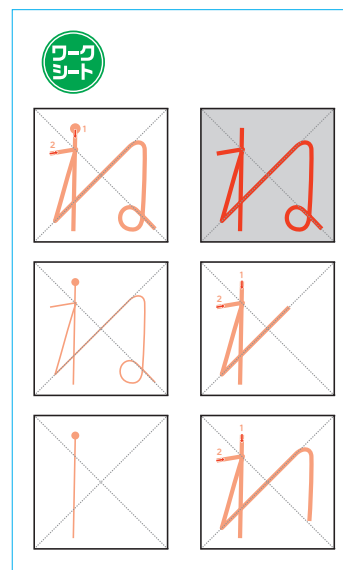


図5 斜めます「ね」

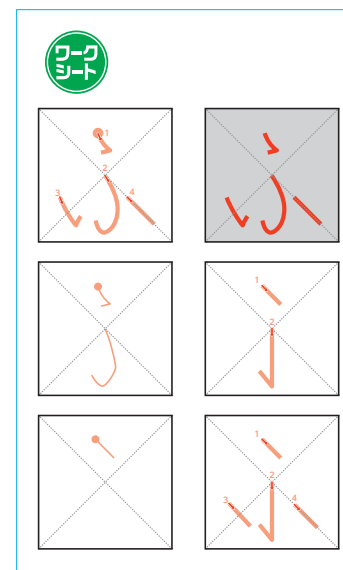


図6 斜めます「ふ」

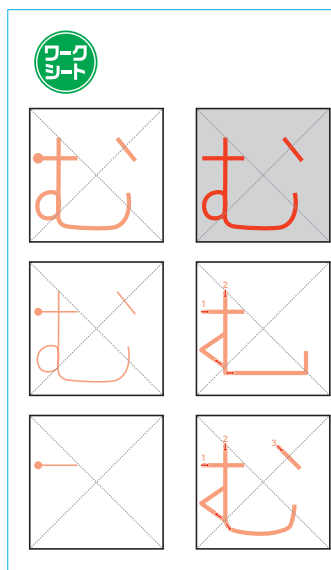


図7 斜めます「む」

文献

- 1) 笹田哲監修「苦手をできるに変えるからだのつくり方 第2巻 手の動き～えんぴつ・ハサミ」著（DVD版）アローウィン（2014）
- 2) 笹田哲「気になる子どものできた！が増える 書字指導アラカルト」中央法規（2014）
- 3) 笹田哲「気になる子どものできた！が増える 書字指導ワーク1 字を書くための見る力・認知能力編」中央法規（2014）
- 4) 笹田哲「気になる子どものできた！が増える 書字指導ワーク2 ひらがなの書き方編」中央法規（2014）
- 5) 笹田哲「気になる子どものできた！が増える 書字指導ワーク3 カタカナ・数字の書き方編」中央法規（2014）